



河曲地区地域づくり協議会

広報 かわの

令和4年12月20日 第11号

1300年の歴史を背に 伊勢国分寺まつり催行

令和4年10月29日

コロナ禍のため2年ほど開催延期となっていた伊勢国分寺まつりは、令和4年10月29日、観客の皆さんと主催関係者合わせて1200名が集う賑やかな祭典の日を迎えることができました。

今回のお祭は、一般財団法人地域活性化センター、鈴鹿市観光協会、鈴鹿市教育委員会、鈴鹿市の後援のもと、公益財団法人地域社会振興財団の交付金を受け、人生100年時代づくり・地域創生ソフト事業として実現をみたものです。

幸い、各種企業団体各位からは新規の祭典ゆえか篤いご支援を賜り、多大の御寄附を頂戴いたしました。衷心より御礼申し上げます。

今年は伊勢国分寺史跡指定100周年、鈴鹿市制施行80周年の節目の佳年にあたり、延期により2つの立派な冠を戴す記念の祭典ともなりました。

準備は令和元年から始まり、林紘実行委員長の総括のもとに、舞台発表・模擬店・体験・天平衣装の4部会の皆さんには趣向をこらし、聞いて、見て、着て、楽しめる一日になるよう演出していただきました。

また祭典の舞台は「広報すずか」10月5日号の特集を嚆矢に周知が進み、後述の通り、飯野高校応用デザイン科、竹野町獅子舞保存会、神戸小学校金管バンドクラブ、神戸高校箏曲部、江島若宮八幡神社雅楽愛好会、佐佐木信綱顕彰会、木田町虫送り保存会、鈴鹿と・き・め・きカルチャー大使伊藤ケイスケ氏、ギタリスト横山貢介氏等団体個人の皆様の高い技術力と演技力により、優雅に、且つ軽やかに進行いたしました。重ねて御礼申し上げます。

伊勢国分寺まつりは今回を初回とし、17回を数える磐田の遠江国分寺まつりにならい、今後とも長く回を重ねて行くことができれば幸いです。皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

以下、当日発表された竹野の獅子舞はじめ全11舞台を時系列で写真紹介いたします。

天平衣装行列 11:35～ 参加49名(大人35、子供14)





司会進行 10:50 ~ 国分寺歴史講話



神戸小学校金管バンドクラブ 11:05 ~



獅子舞 10:00 ~ 竹野町獅子舞保存会



開会式 10:30 ~ 末松則子鈴鹿市長祝辞

衣装行列 11:35 ~ 太鼓先導 2番目・国分寺国師 3番目・大伴家持 4番目・同夫人 衣装監修・大杉淳 衣装制作・飯野高校応用デザイン科生徒及び実行委員会担当部会員
天平時代 聖武天皇治下の729年から749年にかけて唐の影響を色濃くうけ、国際色豊かで華麗な仏教文化が花開いた時代





神戸高等学校箏曲部 12:05 ~ 伝統を受け継ぐ12名



神戸中学校吹奏楽部 12:35 ~ 初めての野外演奏



雅楽 13:05 ~ 江島若宮八幡神社雅楽愛好会



万葉歌朗詠 13:35 ~ 佐佐木信綱顕彰会



木田町虫送り 14:05 ~ 木田町虫送り保存会





津軽三味線 / 伊藤ケイスケ ギター / 横山貢介 14:35 ~
鈴鹿と・き・め・きカルチャー大使



各種体験 蓮花舞台と唐草舞台での11発表に加えて、当日は広い公園内外で午前10時から午後3時半まで、体験部会の皆さんの介添えで、いろいろ体験あそびができるプログラムが用意されていました。

しめ縄づくり、勾玉づくり、火起こし、瓦文鎮、たこあげ、グライダー飛ばし、地震体験車試乗、ふわふわドーム、ゴム鉄砲射的、自然観察、王城桜と鈴鹿市の歴史展示、などです。これ等の雰囲気も写真で味わってみてください。



しめ縄づくり



勾玉づくり



火起こし





写真は上から、瓦文様の文鎮制作、足長大黒タコ揚げ、竹馬、グライダー飛ばし

村名取り戻し騒動 川曲村から河曲村に(1)

明治24年6月12日

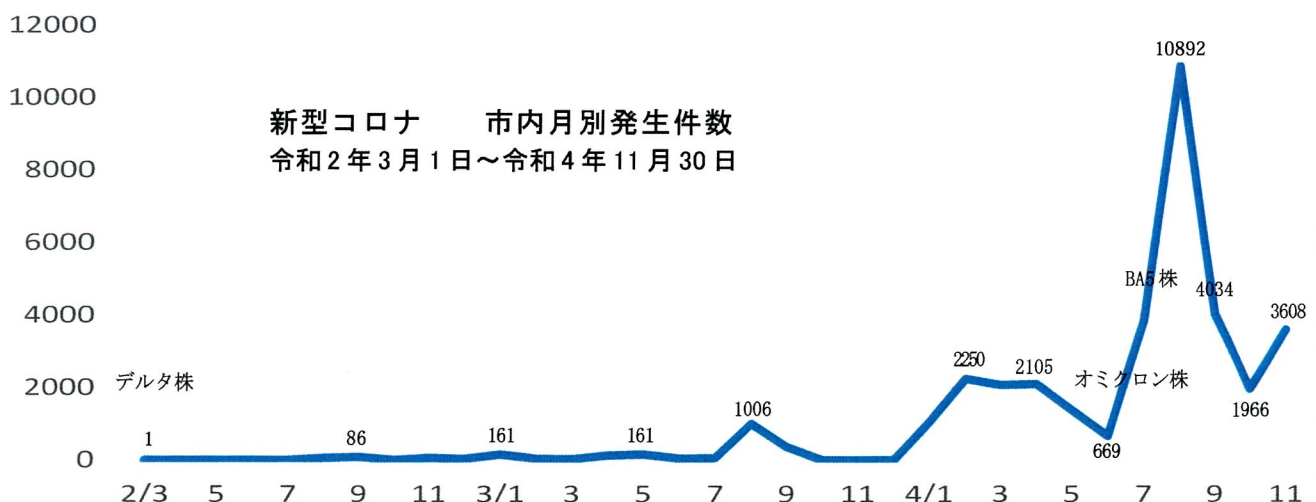
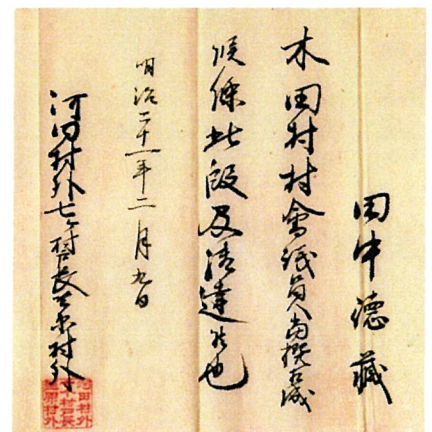
令和4年9月、木田在住の田中勤氏より曾祖父の田中徳蔵さんに係る2通の辞令を拝見する機会を得ました。その2通を見比べることで、私達の「河曲」がじつは県と郡の意向をはねのけて、自力で取り戻した地名であることが判ります。

河田村外七ヶ村戸長役場の発足

明治17年(1884)、河田に役場を置いて戸長の野原村外さんのもとに「河田村外七ヶ村戸長役場」が生まれました。それまでは木田(大谷を含む)・国分・山辺で一地区、野辺・竹野・河田で一地区、十宮・須賀・林崎・南林崎で一地区、などばらばらでした。今回の八ヶ村から成る連合体は、現在の河曲地区の祖型になっていきます。

明治17年体制は明治22年3月まで続きます。写真の徳蔵さん宛の、明治21年2月発行の当選証書はこの頃の状況を語っています。

ついで時代を画する法律が明治21年4月に生れます。1年後の施行を前提とする「町村制」の公布でした(以下本誌12頁に続く)。



自主防災隊の錬成 令和4年度河曲地区防災訓練 鈴鹿市消防団第6方面隊担当

11月20日、令和4年度河曲地区防災訓練が鈴鹿市消防団第6方面隊の担当で実施されました。

今回は「自主防災隊」の組織活動の再認識と点検、併せて自治会組織の防災意識の向上が訓練の目的でした。

地域防災の要として「自主防災隊」が各自治会単位で組織されていますが、大震災時、警察・消防が全てには手が回らない事態が想定され、現状の「自主防災隊」が災害時にどこまで機敏に動けるか、という課題があります。

今回は杉本賢志鈴鹿市消防団々長の指揮下、河曲・神戸・飯野・ひまわり4分団のプロの隊員による、セミプロであるべき自主防災隊員への濃密訓練を通し、その組織の概要の再確認と活動技量の向上をめざす研修の場、となりました。

当日は8時からのサテライト型避難訓練（実績は右下に詳報）を済ませたのち、各地区防災隊員各10名全160名の参集をまって、関係者200名により9時10分から河曲小学校運動場及び体育館で初期計画に沿って展開されました。

訓練は1）起震車搭乗による地震体験、2）仮設テントロープ結び体験、3）避難所準備品展示見



避難所（河曲小学校）備蓄物資の展示紹介

避難所（河曲小学校）備蓄倉庫・備蓄物資28品目一覧

ダンボールベッド、スチール製簡易ベッド、クリアボックス（感染症対策用品入れ：消毒液、トイレクリーナー、ニトリルグローブ、ペーパータオル、マスク、体温計）、担架、プライベートテント、大型乾燥機、紙コップ、毛布、トイレットペーパー、非常用トイレ、非常用トイレ処理袋、LPガス・ガソリン発電機、非常用LED照明、延長コード、ガソリン缶、エンジンオイル、キャンパス水槽、給水袋、リヤカー、ブルーシート、乾パン、ポリタンク、消火バケツ。なお、各物資の数量は定員に見合う数。



仮設テントロープ結び体験

学、4）救急処置体験（AED使用、負傷者搬送、簡易応急処置）、5）防災隊ポンプ放水（8頁写真参照）、によりセミプロの錬成が図られました。

最後に末松則子鈴鹿市長の挨拶、落合満弘鈴鹿市消防長の訓練講評があつて閉会となりました。

サテライト型防災訓練 11月20日



サテライト訓練本部 各地区からの報告を待つて集計作業に注力。令和4年度の実績は地区全体で参加1507人、人口比14.8%となりました。

防災訓練 地区別参加者 R4.11.20

地区	人口	参加者	参加率 %
河田	413	91	22.0
野辺	1096	224	20.4
竹野	1866	134	7.2
木田	845	89	16.7
大谷		52	
山辺	333	66	26.7
ラウムズ		23	
国分	925	173	18.7
須賀	1356	314	23.9
十宮	3349	153	10.2
宮の前		45	
東十宮		30	
西十宮		41	
南十宮		48	
北十宮		12	
中十宮		12	
采女が丘	29	0	0
合計	10212	1507	14.8



国分寺まつりに備え草刈り実施 10/15



10月29日開催予定の国分寺まつりに備え、10月15日に自治会長はじめ地域の役員さん方42名により、祭の会場を中心に草刈りを行っていただきました。小学校、中学校もいつも通り綺麗になりました。

おかげで当日は快晴のお祭り日和となり、唐草舞台も一段と映えていました。

◆死骸あつめの人生◆

戸田豊さん

地球の化石採集50年(その1)

日本古生物学会の会員として

今から30年前、河曲小学校創立100周年の記念事業実施を迎えた平成3～4年度、戸田豊さんはPTA会長として最前線で活躍されました。

ですが素顔は表題の通り、最近まで化石を専門に日本古生物学会の会員として活動してみえました。石の延長で米国宝石学会公認の鑑定鑑別士(GIA. GG)の資格もお持ちでした。須賀の国道23号線沿いには「ゆたか化石資料館」が建ってます。

以下、その50年にわたる化石採集の足跡を語っていただきます。医学博士で昆虫博士の養老孟司さんは万余のゾウムシ・コレクションで有名ですが、これは戸田豊さんの化石コレクション1万点に係るお話で、カルメン・マキの名曲「だいせんじがけだらなよさ」を地でいく「だいせんじがめつあいがし」の近況報告です。本誌11号に1～6節を、次号12号に7～11節を掲載します。

- 1 小・中学校の頃
- 2 神高地学クラブ オオバラモミ
- 3 東海化石趣味の会、のちの化石研究会
- 4 北海道アンモ採集 出会い
- 5 アメリカ、メキシコ発掘採集行
- 6 鑑別鑑定士の資格取得 転職
- 7 地元回帰
- 8 ネパール 地球環境保全ボランティアで
- 9 ネパール再訪
- 10 三主要サイトで化石採集
- 11 とりあえずの当館一押し

1 小・中学校の頃

小さい頃からいろんなものを集めるのが好きだった。牛乳のフタ、マッチの空箱、箸入、切手、古銭、土器、矢じり、ショウヤ、虫、貝、魚等。岩石や鉱物に興味は無かった。

綺麗な色の石は拾ってきていた気はするが、これを親に訊くと、その種のものに限ってきちんと箱に入れ、名前を書いてとってあったそう。チャランポランだと思っていたので、我ながら聞

いてびっくりした。

中学時代は卓球に夢中だった。趣味がらみの記憶はない。3年生になって一応勉強して神戸高校に入学した。ここからが私の「死骸集めの人生」の始まりだった。

2 神高地学クラブ オオバラモミ

高1の1学期早々、クラスの日比野君から地学クラブに入部を誘われた。その学期末、須賀の友達のかっちゃんから、黒っぽく汚いどろが固まったような松阪産の二枚貝を貰った。化石は知っていたが、実物を見て触ったのは初めてだった。なに、なぜ、どうやって、いつ出来たのか、次から次に疑問が湧いた。これがその後一生付き合う化石、つまり古代生物の死骸、との出会いだった。

残念なことにこの時の二枚貝はどこかへ行って手許にはない。或いは地学の宿題で提出し、そのままクラブの部室に残っているかもしれない。

二学期から日比野君の誘いもあって地学クラブに入った。顧問は赤嶺先生。石が好きだけでクラブに入ったので、先輩たちには叱られたが、天体やら気象等には殆ど向き合わなかった。

初めて化石を採りに出たのは、日比野君から教わった近くの高岡山、通称ハゲ山だった。一人で自転車で行って、粘土の中に黒くなった「オオバラモミ *Picea koribai*」の化石をみつけた。自分の手で採った初めての化石だった。

それは最終氷河期に絶滅したバラモミ種で、その現生種にアカエゾマツ、ヤツガタケトウヒ、イラモミ、ヒメバラモミなどがある。

持ちきれないほど採った。どうやってあれほど多くを持ち帰ってきたのか覚えてないが、昭和43年5月、とにかく自転車で持ち帰った。

モミは乾くとボロボロになり、化石が粘土から

初めての採集化石 *Picea koribai* 昭和43年5月

剥がれてしまう。ニスを塗り保存策を講じるが殆どが割れる。とはいえ令和4年9月現在、まだ標本箱に2、3個、ラベルとともに残っている。

私の性格からしてこれは輝石的でも偶然でもない。何故か化石だけは手許に残る。地学の教科書、宿題のスクラップブックも残っている。化石なら自分もびっくりするほど頭の中に入ってくる。勿論、疑問は自分からすぐ調べる。この頃は採集が本業、他の余分な勉強時間などある訳なかった。

3 東海化石趣味の会、のち化石研究会

二年生の夏休み前、昭和45年7月、新聞で「東海化石趣味の会」を知った。児童生徒の健全育成を目的に、中日新聞社が中心となって立ち上げた会で、その半年前に発足していた。

入会し、いろいろな方たちと話をした。ベースが同じなので、すぐに仲良くなれた。同年代の人が多かったが、私の知識レベルの比ではなかった。ほぼ全員が専門家。趣味の会はおもて向き、本来は化石研究会だった。本拠が名古屋なので例会や巡検に行けず、資料を送って貰ったり、電話、手紙での参加が多かった。それでも楽しかった。

大阪でも、別の出会いがあった。建築系の専門学校在学中のことだが、下宿の近くに東海化石研究会の知り合いの方がいた。それも運悪く学校と下宿の中間にみえた。おかげで休みや学校帰りにはお邪魔して、化石関連の話ができた。世界の化石、展示会、採集、即売会など、必要情報は常にアップデートできた。2年間、建築の勉強は頑張ったが、いま思い出すのは化石の事ばかりだ。

4 北海道アンモ採集 出会い

昭和48年、鈴鹿に戻って総合建設業、いわゆる土建屋に就職した。仕事は楽しく、毎日が充実していた。同時に化石もずっと頭の芯にあった。思えばこの切り替えがストレスを軽減し、仕事を楽しくしてくれた。

土建屋の三年目のとき、初めて北海道にでかけた。その後、何度も出かけた。仕事でも観光でもなく、アンモナイト採集のためだった。思えば有休を下さった会社には感謝、感謝である。

この北海道で大きな出会いがあった。川下由太郎氏と知り合えたのだ。はじめは遭遇だった。私達が上流に向かってアンモを探していた時にガサガサと上の方から音がする。熊だ、とみんなが慌て

騒いだ。その熊こそが山越えて川上から下りてきた川下氏だった。氏は北海道三笠市出身、アンモに魅せられた市井の研究家で小島先生（後述）に採集協力し、いくつも新発見を重ねてみえた。

知り合って10年後、私の日本古生物学会への入会にあたり、氏に繋いで貰った。入会には二名の推薦が必要で、氏は古生物学会の重鎮である小島郁生先生にお願いして下さった。

先生は九大理学部卒、アンモナイトや中生代白亜紀の恐竜が専門で、国立科学博物館研究員を長くつとめ（のち同館名誉館員）、その分野の泰斗であり、誰もがそのお名前を存じ上げている方だった。

5 アメリカ、メキシコ発掘採集行

昭和52年、都合で建設会社を替わろうと考えていた時、東海化石研究会の副会長岩島幾芳氏から、一緒にアメリカへ恐竜化石を掘りにいかないかと誘われた。即決、これ幸いに会社へは辞表をだした。同年8月、8日間10名の遠征が決定、副会長の長男裕芳さんも一緒だった。

アメリカ、ユタ州バーナルでレンジャーの方達と一緒に恐竜発掘をやった。中生代ジュラ紀の地層で、採集した化石は全部持ち帰って良い、といわれて頑張り、草食恐竜の尾骨をゲット。レンジャーの方から、良いものだから大事に、と言われて感激した。カメ、サメの歯、石油の化石も採った。カメは「悪魔の遊び場」という凸凹した地形のため周囲が見えない場所で、みんなで声を掛け合い探しまわった。サメの歯は新生代新第三紀層の崖の途中の砂場で、蟻が地中から邪魔になるもの、つまり歯、を地上に運び出してくるのを待っておれば戴けるおいしい石だった。石油の真黒化



悪魔の遊び場 カメの化石発掘に挑む



草食恐竜化石の採集 パーナルのジュラ紀層で

石は軽くてぴかぴか。地上にごろごろ転がっていた。真っ黒の油も地面から噴き出していた。

帰国すると、やはり、恐竜に凝りだした。どんな種類が、時代は、日本でも出るのでは、などいろんな本を集めにかかる。しかし溜まるは資料ばかり、実物にはお目にかかれない。やはり実際に採れて触れるのが一番だ。

2年後、今度はメキシコへ8日間のオパール採りに行かないかと又、岩島副会長に誘われた。今度は次男隆史君と一緒にだった。

昭和53年大晦日午後10時成田発。メキシコ・シティーに25時間後に到着。現地では有名な画家の方がずっと案内して下さった。電柱より太いサボテン、車の橙ライト、お土産店、など風景まじりの記憶がある。

お昼に日本食が用意されていた。弁当のお箸でつつきながら石探しをやっているとガイドがバスから飛び出してきた。ガラガラヘビがいるので歩き回らないで、という。でも誰も止まらない。

オパール採りと化石採集は本当に面白かった。ここの鉱山は閉鎖するので好きなだけ採って良いと言い、先方はハッパまで掛けてくれた。オレン



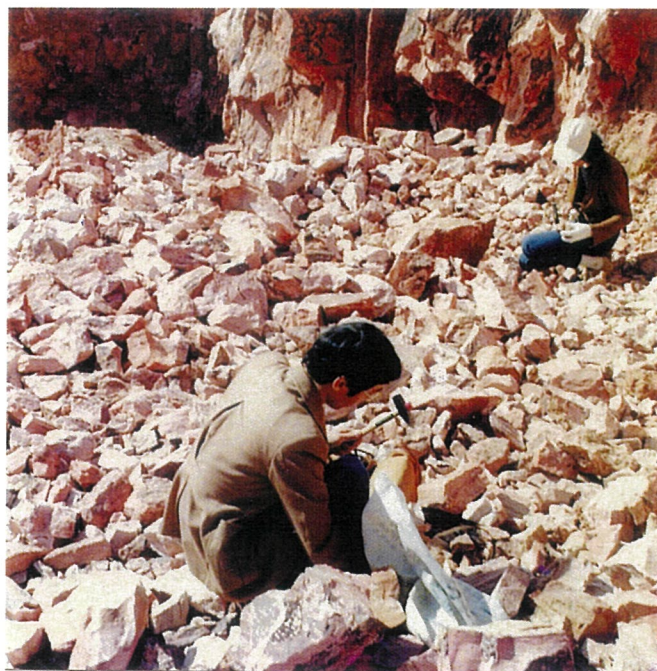
サボテンの脇で空手演舞 プエブラ州ティワカンにて

ジ色のチェリー・オパールが手に入った。

化石では中生代白亜紀の三角貝（トリゴニア）が採れた。乾いた河の中に落ちているとの事で探すけどほとんど無い。暫くすると、めったに出来ない日本人をカモと見たか、現地の子供達が化石を持って売りに来た。カモンと、全部買った。

戻りのバスの中は入手した化石のくじ引きとオークションで盛り上がった。空港では大量の化石の機内持ち込みで重量オーバーの追加料金をとられそうなニアミスを経験した。幸い、これには現地の方が手を回してくれて助かった。

帰国の機中では、早速、次はどこへ行こうかの話ばかりだった。頑張って旅費を稼がなくては次がない、ということで気合が入り、以後、転職先の土建屋での仕事にはしっかり腰が入った。メキシコの石が転進を後押ししてくれた。



ケレタロの鉱山で二人揃ってオパール採集

化石採集をやりながらの昭和55年5月、結婚した。新婚旅行ではアメリカの石仲間を尋ね、博物館などへ連れて行ってもらった。とにかく新妻には新生活に備え、自分の少年期からの化石愛について早めに知っておいてもらいたかった。

6 鑑定鑑別士の資格取得 転職

3年ほど経ち、東海化石研究会のメキシコ仲間岩島隆史君がGIA.GG(米国宝石学会公認・鑑定鑑別士)の資格を取得したと知った。2年程かかるけど戸田さんも挑戦してみても、との誘い。

結婚して子供も出来た。このまま土建屋だと思う反面、好きな石に関する資格で仕事ができるの

も魅力。まず挑戦してみようと思った。必要金額100万円というのはちょっと痛いですが、隆史君からいろいろと情報を得て申し込む。

自分でも驚いた。毎日毎日土建屋の仕事を終えて疲れて帰っても勉強は楽しく出来た。おかげで2年弱で資格取得ができた。

昭和60年6月、宝石関係の職場に変わった。籍を置いた名古屋の日米宝石鑑別センターの職員は、みんな石好き、宝石好きの人ばかり。なかでも若い神谷君は私と同じ鉱物・化石採集・収集が趣味でハイレベルの人。いろんなところへ一緒に連れて行ってもらった。

2ヶ月後、魅かれて名古屋鉱物同好会に入会、鉱物を本格的にやり始めた。仕事は時間的には辛いが楽しかった。石の話をしながら顕微鏡覗き、休日は神谷君と採集三昧、本当に充実していた。

(以下、『広報かわの』第12号につづく)

村名取り戻し 川曲村から河曲村に (2)

明治24年6月12日

地元の意向無視、新村名は「川曲村」とすべし

明治21年4月、令和の現在に繋がる町村区画の枠組が決まりました。明治17年以来、野原戸長が宰した「河田村他七ヶ村戸長役場」は解散になり、新法制下で新村発足の運びとなりました。

ついで4ヶ月後の明治21年8月、新村名を何とするか、との県から諮問に、河田を軸に川南の野辺、川北の山辺を視野に「河辺村」、河曲郡の中央に位置するの意を込めて「河曲村」、の二案を俎上に附し、最終的に八ヶ村代表20名の総意として「河曲村」としたい、と回答しました。

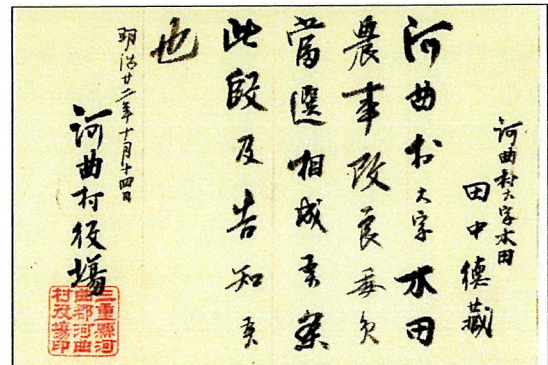
ところが、明治22年3月1日、発された県令第十三号によれば、「来ル四月一日ヨリ本県下町村ノ内左ノ通り分合改称ス」の前置きのもと、「川曲村」と改称すべしとの通告でした。地元の意向無視、想定外の「川曲」を押し付けられたのです。

これにはみんな憤慨しました。「河曲村」は河曲郡の雄たるべく自負に発した地域住民の衆智の所産でありました。

町村制施行に合わせて人事異動があり、野原戸長は箕田村々長に栄転、代わって奥村要蔵が「川曲村」の村長に着任しました。ここで奥村村長は野原前戸長と地元の意を戴したのか、凄いことを進めます。

役場名も公印も「河曲村」で押し通す

写真は田中徳蔵さんが、町村制施行半年後の明治22年10月に役場から貰った農事改良委員に係る辞令です。役場ですから法令の遵守は絶対。役場名と公印は「川曲村」で然るべきですが、なんと「河曲村」になっています。諮問回答直後に作成していたのか、「河曲村」の角印を公用しています。さらにこのあと、奥村村長の気概か、県に対し行政不服の改称申請にも踏み出します。



「三重県告示第六十一号」と改称公認祝賀会

県内で新村名に不満で改称請願した村は10ヶ村ほどありましたが、2年後の明治24年6月に「三重県告示第六十一号」が発令されました。

明治二十三年法律第七十七号第一條ニ依リ河曲郡川曲村ヲ河曲村 安濃郡草谷村ヲ草生村 一志郡佐田村ヲ倭村ト改称ス 明治二十四年六月十二日 三重県知事 成川尚義

これにより草生村、倭村とともに河曲郡に河曲村が公認となりました。翌明治25年には晴れて河曲尋常小学校が開校されます。

改称公認に鑑み、10月、村は祝賀の懇親会を設けました。出席者は奄藝河曲郡書記山田光寿、吏員水原平三郎、杉崎正慶、河曲村々長奥村要蔵、吏員青木謙造、浜口静一郎、松林嘉右衛門、山宿四郎兵衛、田中平治郎、元河田村外七ヶ村戸長野原村外、各大字代表の松岡周次郎、鈴木定右衛門、鈴木源左衛門、萩政吉、林杏作、藤井千代丸、林平四郎、長岡善六、森口政之助、生川忠右衛門、永戸新五郎、清水與平治、永戸藤吉、田中分吉、清水弥吉、古市與一郎、杉崎厚次郎、川北平助、欠席は片岡与三郎、橘頭、木田村総代の各氏。村名「河曲」の復活劇、これにて一件落着です。

河曲地区地域づくり協議会広報紙

『広報かわの』第11号 令和4年12月20日 発行
発行責任者 河曲地区地域づくり協議会 事務局長
事務局 河曲公民館内「地域部屋」電話059-390-1295